

商いの新しいものさし

第67回

（株）商い創造研究所
代表取締役

松本 大地

地域資源を活かしたカーデンカフェの魅力

今、日本国内にあるカフェの数は7万店を超え、5万5000店のコンビニよりも多い。またカフェの主力であるコーヒーの消費量は、アメリカ、ブラジル、ドイツに次いで世界第4位とコーヒー大国でもある。カフェ業態を日常の生活の中でたびたび利用する「フリーカフェ」と、非日常の特別な場所として訪れる「ノン・デイリーカフェ」の

2つに大別すると、従来の喫茶店やセルフ型のドールコーヒー、スターバックスといったチェーン店は生活の延長線上にある「フリーカフェ」と位置づけ、ノン・デイリーカフェとは普段の生活の延長線上とは違う場所で、新たな刺激や発見に出会える非日常型のフリーカフェといえる。

先日、札幌で講演をした翌日に地元在住の知人と訪れたのは札幌に隣接する南空知エリア。札幌から車で50分という、都会に近いほどよい距離の田舎には、田園風景と豊かな食材と癒される空間があった。農園や花畑に囲まれたレストランでのランチ、北海道最古の蔵元探訪、道の駅を回り、最後に訪れたのは千歳川のほとりから山道に分け入った場所にある「カーデンカフェ」。都会の喧騒を

離れた、野鳥の声が聞こえる森の中には自然豊かなハイセンスの空間があった。2011年に開業した「Meon(メオン)農苑カーデンカフェ」は、まさにノン・デイリーカフェ。草花や小果樹を育てながらカントリーサイドの素朴で豊かな自然の暮らしを提案するという、農園と庭苑と食空間が融合したコンセプトがある。ここで育てられたハーブやハスカップ、ブルーベリーなどの小果樹や地元農家からの採れたて食材を使ったランチやタルト、デザート、ドリンクなど身体に優しいメニューが揃う。大きな窓から見える緑は、絵画の

ような美しさで目を惹きつけてくれる。内装の木の温かみは癒しの空間を生み、アンティーク家具を使った人のインテリジエンスを語りかける。心も身体もリラックスできるのは、植物、野鳥、森の木々、流れる水の音、すべて人工物ではなく自然が放つ心地良さからだろう。季節によって変わる景色は、再び違う時期に訪れるのも楽しみの一つとなる。

新千歳空港から10km離れた山の中に、わざわざ札幌市内からわざわざ全国から口コミやインターネットで情報を得た人々が感動体験を求めて訪れる。感動につながる大切なことは、オーナーの役割がある。

カーデンカフェが成立する商いのものさしは、豊かな自然があり土地が安い場所であること。周辺に豊かな食材があること。オーナー自身造園作業が好きなこと。オーナーの生活文化の感性が高いこと。これらのものさしを満たせば、商いの場として使われるが、ノン・デイリーカフェはつるおいの場、味わえる場としての役割がある。

美味いコーヒーがコンビニで手軽に飲め、チェーン店のセルフカフェや高齢者が利用しやすいカフェ、そしてサードウェーブコーヒー人気からヒューマン気から海外の著名店まで様々なコンセプトをもったカフェが増えてきた。すでにカフェは飲食店の枠を超えて、地域の「コミュニティ」の場としての役割も担う。元気がない地方を訪れると、「人もいなく、買

心構えがどう見えるかにある。このオーナーは長年岩見沢にて生活雑貨店を経営し、その後飲食業での経験を重ね、最終目標であったカーデンカフェを、夫妻で営む。庭園や農園の手入れ、アンティーク家具や生活雑貨の仕入れ、接客、食事に至るすべてに愛情が注がれる結果、単に飲むコーヒーではなく、味わうコーヒーとなり、食べる料理ではなく、味わう料理となる。デイリーカフェはリラックス、気分転換、くつろぎ、商談の場として使われるが、ノン・デイリーカフェはつるおいの場、味わえる場としての役割がある。

い物する場所もなく、あえるのは自然だけ」とさげすむ言葉をよく耳にする。しかしながら、辺鄙な場所ながらも自然に囲まれた飲食体験を目指して人が訪れるカーデンカフェの集客力には驚かされた。その背景には、何らかのストレスを抱える人が多い現代社会では、自然とふれあうことで人の五感を活性化させ、目覚めさせる庭園療法としての「カーデンセラピー」のニーズが叫ぶ。ノン・デイリーカフェを代表する「カーデンカフェ」業態は、現代生活者につながる提供される精神文化の場として、また自然豊かな地方の魅力を伝える大きな役割も期待できよう。

豊かな自然で五感を刺激する「Meon農苑カーデンカフェ」



豊かな自然で五感を刺激する「Meon農苑カーデンカフェ」